

平成 23 年度

岩手県

「被災地発達障がい児支援事業」
事業活動報告書

平成 24 年 3 月 21 日

一般社団法人 日本発達障害ネットワーク（JDD ネット）
岩手県「被災地発達障がい児支援事業」実施担当専門家チーム

はじめに

本報告書は、平成 23 年 8 月 17 日に岩手県より公示された「被災地発達障がい児支援事業」を一般社団法人日本発達障害ネットワーク（JDD ネット）が受託し、実施した活動の報告書である。本事業は「東日本大震災により被災した本県における発達障がい児（者）への長期的な支援体制を構築するため、県内の保育関係者、保健師、療育関係者、相談支援専門員、学校教員を対象とした専門研修及び心理的ケアへのコンサルテーションを行うこと」を目的としたものであり、以下の事業内容が求められるものであった。

発達障がい児（者）支援の専門知識を有する学識経験者、臨床心理士等からなるチームを編成のうえ、年 2 回以上、本県内陸部及び沿岸部（久慈・宮古地域及び釜石・大船渡地域）にチームを派遣して次のような取組を行う。

- (1) 保育関係者、保健師、療育関係者、相談支援専門員及び学校教員を対象とした専門研修の実施
- (2) 保健機関、保育所、幼稚園、療育事業者、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、相談支援事業所などの発達障がい児（者）の支援機関や、JDD ネットいわてなどの当事者団体からの要請に応じた専門的なコンサルテーションの実施及び被災地域における関係機関とのネットワークづくりの後方支援
- (3) 上記(1)及び(2)の実施に関する岩手県総合教育センター、発達障がい者支援センター“ウィズ”及びJDD ネットいわて等に対する震災後の発達障がい児（者）への長期的な支援に向けた各種助言

(以上、事業公募の公示文書から引用)

私たちは平成 23 年 10 月 15 日から 18 日、および平成 24 年 1 月 27 日から 30 日の日程で、岩手県を訪問し、上記の事業目的を受けた支援活動を被災地沿岸部を中心とする県内各地で行った。その際、私たちが重きを置いたのは事業目的の(2)に掲げられた「被災地域における関係機関とのネットワークづくりの後方支援」である。

JDD ネットの「被災地専門家派遣チーム第 2 陣」が平成 23 年 5 月 7 日から 13 日にかけて行った被災地派遣活動の報告書（「発達障害支援」から見た被災地の現状と今後の課題および提案）【URL http://jddnet.jp/index.files/archives2011/pdf/20110525_kadai.pdf】に示されたように、震災後の発達障害支援の課題は、実は、震災前の平時からの地域課題と密接につながっており、その地域課題とは、被災地沿岸部における、保護者のつながり、そして保護者と支援者のつながりといった、地域ネットワークの脆弱性だったからである。

勿論、震災に直結した課題は、福祉避難所の設置や緊急時の情報共有などいくつもある。しかし、これからの地域復興の中で、発達障がい児者が自分らしく生き活きと暮らしている地域であることが、震災などの非常時にすべての人が支え合える条件となると思われたのである。

実際、本事業で実施した 2 回の支援活動を通して、私たちが得たことは、被災地沿岸部の地域の人たち自身が、地域ネットワークを構築していくことを希求しているという事実であった。本報告書を通して、私たちは、これからの復興作業の中で発達障害支援の地域ネットワークが力強く構築されていくことを強く願うものである。

岩手県 被災地発達障がい児支援事業

実施担当 JDD ネットワーク専門家チーム

安達潤（責任者）	北海道教育大学
前川あさ美	東京女子大学
岡村章司	兵庫教育大学
大久保賢一	北海道教育大学
高柳伸哉	浜松医科大学

平成 24 年 3 月 21 日

第 1 回 活動

平成 23 年 10 月 15 日～18 日

平成 23 年 10 月 15 日 (土)

盛岡地域

午前企画：発達障害児を育てる保護者との茶話会

午後企画：研修会 「震災後の子どもの理解とケア」

1. プログラム

盛岡地域における活動は、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された、以下に、プログラムを記す。

<午前> 「発達障害児を育てる保護者との茶話会」 10:00～11:30

司会：前川あさ美（東京女子大学・JDD ネット）

ファシリテーター：前川あさ美・安達潤・岡村章司・大久保賢一・高柳伸哉

（盛岡市勤労福祉会館 会議室）

<午後> 「震災後の子どもの理解とケア」 13:30～16:50

研修①「震災後の子ども達を理解する～SOS のさまざまな形～」

講師：前川あさ美（東京女子大学・JDD ネット）

演習「架空事例に関するカンファレンス」

研修②「震災後の子ども達を支える～サポートの実際～」

講師：大久保賢一（北海道教育大学・JDD ネット）

（盛岡市勤労福祉会館 5 階 大ホール）

2. 企画・活動の概略

震災後の発達障がい児を主としたニーズのある子ども達の状態を理解するとともに、支援の視点や実態に応じた具体的な支援のあり方を、参加者が学ぶことを目的とした。研修①では、トラウマや PTSD の説明、年代に沿った子ども達が示す特徴や支援の原則について講義を行った。次に、具体的な架空事例を紹介し、実際の支援の方法について少人数のグループごとに話し合ってもらった。最後に、研修②において、子ども達が示す様々な行動や特徴にもとづき、それぞれの具体的な支援の実際を紹介した。

また、関係者のネットワークづくりのきっかけとして、保護者や支援関係者を交えた小グループで、震災直後から現在の状態に関する意見交換を行い、最後にグループごとの話し合いの結果を共有した。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

茶話会では、津波ごっこをしたり、テレビを長時間見続けたりするなど、普段と違う状況が見られた子どもや連絡が取れなかったときの困難さといった、被災に関する実態が多く報告された。また、盛岡地域と被災地沿岸部の「障がい」に関する地域性の違い、被災地沿岸部での発達障害支援体制構築の難しさなども語られた。以下に、参加者から出され

た意見を挙げる。

- ・親の会などに所属していないと、震災直後には安否確認を含めた連絡が取りにくい。
- ・高校入学の手続きが進まず、見通しが持てないことが不安である。
- ・感覚が過敏な子どもは気付いてもらいやすいが、鈍感な子どもは誰にも気づいてもらえないだろう。
- ・障害と言っても、グレーゾーンの子どもは（支援されるのが）いちばん最後になってしまうのではないか
- ・いつもと違うことを感じ、日常でないことを楽しむ子どももいる。
- ・震災後に話すのではなく、普段から（支援のあり方について）話すべきである。
- ・被災地沿岸部は、内陸との物理的な距離が大きく、発達障害支援の専門家の数も少ない。特に、発達障害に関わる医療資源が乏しいという現状がある。

4. 活動の考察と今後の提案

午前の茶話会での意見交換が示唆している重要事は、津波の被害がなく、地震の影響も大きくはなかった内陸部が、被災地沿岸部のサポートを進めようとした時に、被災地沿岸部における発達障害支援のネットワークがない状況だと、十分な状況把握が難しいという事実である。そして被災地沿岸部で求められるネットワークとは、支援者サイドだけでなく、親御さん同士もつながり合っていくネットワークであると思われた。「震災後に（発達障害支援について）話す」ということではなく、地域における支援を日常的に語り合える状況が、今後の被災地沿岸部で求められるであろう。また、盛岡ではグレーゾーンの子どもの支援の機会もあるようだが、被災地沿岸部ではそういった機会がないことが、茶話会の中でも懸念されている。この点についても、地域ネットワークが存在すれば、その周縁の動きの中で「気づかれにくい困難さを持っている子どもに対する支援」が積み上がる状況が作られていくのではないかと思われる。

午後の研修会では、「研修・講義+小グループディスカッション」という形での学びが参加者にとって新鮮であったとの感触が得られた。このことは「独りで学ぶ」ということではなく、「グループで語り合い、学び合う」ということの重要性が認識された可能性を示しており、午前の茶話会で語られた「ネットワーク」ということとつながっていくものであろう。

平成 23 年 10 月 16 日（日）

宮古圏域

なないろ茶話会 ～ 未来に向かって顔張るために ～

1. プログラム

宮古圏域における活動は、岩手県、一般社団法人日本発達障害ネットワーク（JDD ネット、宮古圏域障がい者自立支援協議会「発達支援部会」の主催により実施された。プログラムを以下に記す。

- | | |
|------------------------------|-------------|
| (1) 開会 | 13:00～13:10 |
| (2) 情報提供 1 | 13:10～13:40 |
| 「震災と子どもたち、必要なこと、大切なこと」 | |
| 講師：前川あさ美（東京女子大学・JDD ネット） | |
| (3) 情報提供 2 | 13:40～14:10 |
| 久慈圏域・宮古圏域の保護者より | |
| (4) 小グループディスカッション | 14:10～15:30 |
| （JDD ネットの前川あさ美・安達潤も小グループに参加） | |
| (5) まとめ | 15:30～15:45 |
| (6) 閉会 | 15:50～16:00 |

（岩手県宮古地区合同庁舎（旧宮古地方振興局）3F 大会議室）

2. 企画・活動の概略

情報提供 1 では、発達障害のある子どもの震災後の子育てエピソードや親御さん自身のエピソードを紹介する中で、子どもだけではなく大人も傷ついていること、失われた写真が戻ってくるなどの小さいけれど喪失の回復が元気づけになること、トラウマ体験を再生する子どもたちの遊び（津波ごっこなど）の意味を知ること、そして、子育てで困っているときの小さな声かけに救われること、などが話された。最後に、発達障害特性があることで大多数の子どもたちと「違う」部分はあるが、その「違い」は「間違い」ではなく、尊重されるべき「違い」であること。Disorders（障がい）の D ではなく、Diversity（多様性）の D として捉えることの重要性が伝えられた。

情報提供 2 では、「久慈地域で親の会を起ち上げて活動を進めているという報告」、「震災・津波で障害を持つ子どもが亡くなり、当たり前のことだが、一人の子どもの尊い命が失われたという思いを強くしたというエピソード」、「震災後に子どもの様子が変わってしまって外出出来なくなってしまったエピソード」、「余震をひどく恐がり、台風などが来ると津波と重なって不安を示すというエピソード」、「放射線の測定を毎日、気にしているという子どものエピソード」、「障がいのある子どもを孤軍奮闘しつつ育てる中で、小さな親の会を起ち上げたというエピソード」等が語られた。

その後の小グループディスカッションでは、以上の情報提供を受けて、これからの発達障害支援のあり方について、意見交換が行われた。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

小グループディスカッションでは、震災時の話しも語られたが、主には、震災前から保護者として感じている地域の（発達）障害支援の体制の弱さが語られた。例えば、就学時に就学前からの子どもの情報が学校に伝わりづらい現状があること、就学時の学校選びをどのように進めていけばよいか、親どうしがつながりあっていくために地域として必要なことが何であるか、重度心身障害を持つ子どもを家庭で育てていくために整備されるべき条件について、などである。また、茶話会に参加した保護者の子育て歴もさまざまであったため、先輩の保護者の方が、新米の父母にさまざまな情報提供とアドバイスをするといった場面もあった。

4. 活動の考察と今後への提案

なないろ茶話会は、今回の茶話会以前から、何度か継続して実施されており、発達障害支援のつながりが着実に積み上がってきていることが感じられた。事後アンケート（回収率 62.8%）の結果でも、すべての回答が「内容はよかった」という評価であり、参加者のニーズに合致した内容であったと考えられる。参加理由については「内容に興味があったから」が約 82%、「気軽に子どもの困りや、親の困りを話す機会がないから」が約 73%であり、保護者を含め、発達障害支援に関わる人たちが日常的に話しをして支援について考えていく機会が求められていることが示された。情報提供 2 の内容も、地域で親の会を起ち上げてきたことが、震災前・震災時・震災から現在までの子どもたちの姿を伝えつつ、語られており、こういった親御さん同士のつながりがさらに、当該地域で広がっていくことが期待される。先のアンケート結果において「今後も、なないろ茶話会に参加したいと思いませんか」という問いに対する「はい」という回答が約 91%であったことから、地域のネットワーク構築が希求されている状況を読み取ることができる。

震災からわずか半年後の茶話会で語られたことが、震災で受けたさまざまな心の痛手を記憶に留めつつも、震災前からの（発達）障害支援体制の脆弱を乗り越えていくための次の地域づくりへと向かっていることは特筆すべきことであろう。こういった地域の動きをいかに支えていけるかが、今後への鍵となると思われる。

平成 23 年 10 月 16 日（日）

大船渡地域

午前企画：発達障害児を育てる保護者との茶話会

午後企画：研修会 「震災後の子どもの理解とケア」

1. プログラム

大船渡地域における活動は、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された、以下に、プログラムを記す。

<午前> 「発達障害児を育てる保護者との茶話会」 9:30～11:00

司会：岡村章司（兵庫教育大学・JDD ネット）

ファシリテーター：岡村章司・大久保賢一

（県立福祉の里センター 会議室）

<午後> 「震災後の子どもの理解とケア」 12:30～15:00

研修①「震災後の子ども達を理解する～SOS のさまざまな形～」

講師：岡村章司（兵庫教育大学・JDD ネット）

演習「架空事例に関するカンファレンス」

研修②「震災後の子ども達を支える～サポートの実際～」

講師：大久保賢一（北海道教育大学・JDD ネット）

（県立気仙光陵支援学校体育館）

2. 企画・活動の概略

震災後の発達障がい児を主としたニーズのある子ども達の状態を理解するとともに、支援の視点や実態に応じた具体的な支援のあり方を、参加者が学ぶことを目的とした。研修①では、トラウマや PTSD の説明、年代に沿った子ども達が示す特徴や支援の原則について講義を行った。次に、具体的な架空事例を紹介し、実際の支援の方法について少人数のグループごとに話し合ってもらった。最後に、研修②において、子ども達が示す様々な行動や特徴にもとづき、それぞれの具体的な支援の実際を紹介した。

また、関係者のネットワークづくりのきっかけとして、保護者や支援関係者を交えた小グループで、震災直後から現在の状態に関する意見交換を行い、最後にグループごとの話し合いの結果を共有した。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

午前の茶話会においては、地域の支援者や保護者が参加し、主に現在の状況（2011 年 10 月段階）と震災直後のことについてそれぞれの立場から語られた。支援者からは、災害発生からしばらくの間は、避難所等を巡回しても子どもの問題行動に関する相談ニーズはほとんど無かったこと、震災後半年ほど経ってからようやくニーズがあがってくるようにな

り新規ケースが増えてきていることが報告された。相談支援専門員からは震災直後の状況について、「連絡さえ取れば、物資は配れたと思う。ネットワークはあったが、それが寸断されてしまった。データも流されてしまった」と情報を喪失してしまったことによる震災直後の支援の困難性について語られていた。

また、保護者からは子どもの様子について、「目立った変化は特にはない」といった意見がある一方で、「ずっと周囲に対して過敏になっている状態が続いている」と報告する声もあった。震災直後、避難所に行くことができなかったという保護者（最初から適応が難しいであろうと遠慮した）からは、車中泊をして何とかやり過ごした時の困難性、不安や悲しみ、そして怒りといった感情面の動揺について語られていた。また、避難所生活を経験した保護者からは、やはり避難所における生活が困難であったこと、「どうして同じように被災したのに自分だけが頭を下げ続けなければならないのか」という憤りについて語られていた。

4. 活動の考察と今後への提案

最も大きな課題は、発達障害のある本人や家族が安心して少しでも適応的に過ごすことができる避難所確保の問題であると考えられた。具体的には行政が福祉避難所を指定し、それが「人々に周知されている」ということが必要である。また、平時から周知した上で避難訓練などを行うことも有効であると考えられる。避難所の問題に関しては、「災害時要援護者の避難支援ガイドラインについて」（内閣府：平成18年）や「福祉避難所設置・運営に関するガイドライン」（厚生労働省：平成20年）が参考になる。また、地域の保護者がその必要性を訴えられていた、「ニーズ別（乳児、食物アレルギー、各種障害、病人、お年寄り）に避難所を分ける」ということも検討の価値があると考えられた。さらにおむつや栄養剤といった重度の障害のある方に必要な物資の確保に関する検討も必要であると考えられた。

平成 23 年 10 月 17 日 (月)

岩手県教育センター 通級による指導担当教員養成講座

「発達障害のある子どもの支援とこころのケア」

1. プログラム

本講座は、今回の事業の枠組みの中で、岩手県教育委員会と JDD ネットの企画・主催によって実施された。以下、プログラムを記す。

- (1) 「発達障がい理解 ～発達障がいを持つ子どもたちの心のケアに向けて～」
講師：安達 潤（北海道教育大学・JDD ネット） 9:00～10:15
- (2) 「発達障がいと支援 ～発達臨床的視点～」
講師：前川あさ美（東京女子大学・JDD ネット） 10:30～12:00
- (3) 「発達障害の子どもたちに対する支援
～ 周囲のかかわり方も含めた環境面の工夫・配慮 ～」 13:00～14:30
講師：大久保賢一（北海道教育大学・JDD ネット）
- (4) フリーディスカッション形式の事例検討 14:45～16:00
(岩手県総合教育センター 花巻市)

2. 企画・活動の概略

岩手県教育委員会の本講座は、本来、通級指導教員 6 名を対象としたものであったが、今回の講座については、県内に広く周知を図り、内陸および被災地沿岸部の学校からの参加者があった。

講義「発達障がいの理解」では、発達障がいの 3 つの主要タイプである LD、ADHD、自閉症スペクトラム障がいのそれぞれについて、認知特性と困難さ、そしてそれらを背景として現れてくる心の問題を説明し、平時の支援を工夫していく視点と心のケアのあり方を伝えた。特に、理解が難しい自閉症スペクトラム障がいについては、複数の事例を提示し、そこから自閉症スペクトラム障がいの認知特性を説明し、参加者の理解を図った。

講義「発達障がいの支援」では、発達が気になる子どもの理解とケアに焦点を当て、「発達」という視点、「困っている」に寄り添う視点、「障害」の D より「違い」の D を見る視点、「治す」ではなく「コントロールする」「生かす」視点、変化は個人を超えて生じるという視点、「受容」をゴールにしない視点、「彼らを合わせる」から「彼らに合わせる」視点、「わたしたち」で生きていくという視点、という 8 つの視点の提示に沿って、すべての子どもたちを、その子どもたちのありのままの姿で受けとめ、その育ちを支えていくことの大切さを伝えた。

講義「発達障害の子どもたちに対する支援」では、行動マネジメントの原理をわかりやすく解説し、発達の気になる子どもとの関わり方を 4 つのポイントに沿って実践的に伝えた。最初のポイントは『子どもを「ほめること」の重要性』であり、「子どもがやる気に

なるときとならないとき」を対比させつつ、子どもが行動をした後にどのように対応するかの重要性を伝えた。次のポイントの『「罰的」、「強制的」な対応方法の問題点』では、それらの効果が一時的であるばかりでなく、子どもの育ちにとって重大な副作用をもたらすことを伝えた。3つ目のポイントである『「スモールステップ」の大切さ』では、子どもが自ら成功しやすくなる状況設定を通じて、子どもの自主性を育てていくことの大切さが、4つ目のポイントの『「自立を促す援助」の考え方』では他者の援助から本人のコントロールに移行していくことの大切さが伝えられた。

3. 参加者の感想

自由記述ではあるが、以下の感想が寄せられた。

- ・私の学校は、被災している児童が3分の1です。震災前から「気になる子」として挙がっている子どもたちの行動の変容が特に目立ちます。また、被災はしていなくても、親戚の受け入れ支援、片づけ等々、町全部が混乱している中で、あらゆる子どもたちが被災している状況だと思います。何か指導のヒントがほしいと思って参加しましたが、私自身が少し落ち着いた気がします。
- ・事例を中心に進めていただき、ヒントをたくさん得ました。講師の先生方も易しい言葉でお話いただき、無理なく心に響きました。関係機関との連携の仕方、保護者対応等について、テクニックや事例などを聞きたいです。
- ・事例検討は、数を減らしてもう少し時間をとるとよいのではないかと思いました。シェアした後、事例の見方とか見逃してはいけないポイント等、スーパーバイズしてもらいたかったです。
- ・講師の先生方のお話は分かりやすく勉強になりました。やはり子どもの姿にしろ、保護者の態度にしろ、実際の行動・ことばを具体的に話していただくことで、より実感をもって理解することができました。話を聞きながら、くつきりと子どもの姿が見えてきたり、明日からはこうしてみようと思えたり、これからの指導に繋がると感じました。
- ・子どもと関わる時「理解する」ということが第一の扉であり、最大の支援になると思っています。その意味で今日の三つの講義はとても発達障害を持つ子への理解が深まりました。現在関心を持っているテーマに響く内容のお話が聞けて嬉しく思いました。(やるきはどこからやってくる？ どうして逃げていく。)
- ・学童保育は多くの子どもが利用している割には手薄である。とりわけ発達障がいに対しての十分な受けとめができていない状態ではない。「うまくいったとき」「うまくいかなかったとき」を冷静に比較し、対策を立てていかなければならない。また、5,6年の発達障がいについてはさらに学んでいきたい。

4. 活動の考察と今後への提案

今回の講座を実施して感じたことは、参加した先生方が、発達障がいの基本的理解と実

際的な支援についての情報を求めているということであった。上記の自由記述の感想にも示されているように、いわゆる「気になる子」の行動変容が目立っているということもあり、震災・津波によるトラウマ体験とその子どもの発達障がい特性の両方の視点で子どものサポートを考えていくことの重要性を、今回の講座で共有できたと思われる。その意味で、今回の講座は参加者のニーズに一定程度、応えていたと考えられる。今後の教員研修の方向性としては、小グループディスカッションによる事例検討が求められているように思われる。この方式の研修会は、参加者相互のつながりが形成されるという点で、その学びが各学校の教員集団のつながりを醸成していく可能性を持っている。

発達障がい特性を持つ子どもたちの震災・津波によるトラウマ体験による行動変容に対する支援は、その状態像を丁寧に見取り理解していくことが第一歩となる。そのためにも、各学校での教員集団のつながりを醸成し、子どもを見守る眼差しを相互に共有していける学校づくりにつながるような研修企画が、今後とも求められると考える。

平成 23 年 10 月 18 日 (火)

県南地区

午前企画：発達障害児を育てる保護者との茶話会

午後企画：研修会 「震災後の子どもの理解とケア」

1. プログラム

県南地区における活動は、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された、以下に、プログラムを記す。

<午前> 「発達障害児を育てる保護者との茶話会」 10:00～11:30

司会：安達 潤（北海道教育大学・JDD ネット）

ファシリテーター：安達潤・大久保賢一・高柳伸哉

（奥州市江刺総合支所 1 階多目的ホール）

<午後> 「震災後の子どもの理解とケア」 13:30～16:00

研修①「震災後の子ども達を理解する～SOS のさまざまな形～」

講師：安達 潤（北海道教育大学・JDD ネット）

演習「架空事例に関するカンファレンス」

研修②「震災後の子ども達を支える～サポートの実際～」

講師：大久保賢一（北海道教育大学・JDD ネット）

（奥州市江刺総合支所 1 階多目的ホール）

2. 企画・活動の概略

震災後の発達障がい児を主としたニーズのある子ども達の状態を理解するとともに、支援の視点や実態に応じた具体的な支援のあり方を、参加者が学ぶことを目的とした。研修①では、トラウマや PTSD の説明、年代に沿った子ども達が示す特徴や支援の原則について講義を行った。次に、具体的な架空事例を紹介し、実際の支援の方法について少人数のグループごとに話し合ってもらった。最後に、研修②において、子ども達が示す様々な行動や特徴にもとづき、それぞれの具体的な支援の実際を紹介した。

また、関係者のネットワークづくりのきっかけとして、保護者や支援関係者を交えた小グループで、震災直後から現在の状態に関する意見交換を行い、最後にグループごとの話し合いの結果を共有した。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

茶話会では、震災後の支援ニーズや発達障害の子どもの様子に加えて、沿岸南部の被災地（気仙地域）の発達障害支援状況、当該地域に対する内陸部（奥州市・一関市）からの支援をどのように進めていけばよいか、その支援を送り届けることやこれからの体制整備に係わる課題、などが語られた。以下、主な意見を列挙する。

- ・時間経過につれてニーズが変化していく。生きること⇒住居⇒衣食⇒家具・家電など⇒現在は仕事
- ・発達障がいのある子では、習慣的な行動ができないことによるパニックや映像などによる追体験もみられた。親も仕事があったり祖父母に面倒を見てもらうのも難しく、デイサービスなど決まった時間に行くところがあって落ち着けるとよいのではないかと。
- ・地域による被害の差が大きく困り感を声に出せない。子どもの発達障がいあるなしにかかわらず、母親が不安定な家庭で異常な状態がみられる。
- ・親の会自体が少ない。特に沿岸部では家族に発達障がいについての理解がない場合が多い。祖父母

の反発も強いため、家族への働き掛けや支援が必要ではないか。

- ・ 青年期や幼児期などニーズが違うので親の会の存続が難しい。また、障がいの種類毎に親の会ができて細分化しており、発言力が低くなっている。親の会の中でも、メンバー間の温度差も大きい。
- ・ 情報の共有は必要と思うが情報を届ける場所がない。避難所の不足。発達障がいを考慮した場所の確保の問題。徒歩で避難できるか、など。

4. 活動の考察と今後への提案

災害による物理的・心理的被害はもちろんのこと、生活状況や環境の変化によって発達障がいの子がより不安定になるという悪循環がみられた。また、当然ながら地域で十分な支援ができる状況ではないとともに、発達障がいへの理解不足や親の会などの支援ネットワークが不足している状態が家族や支援者の訴えからうかがえた。保護者や支援者はとても積極的な姿勢がみられた一方、活動場所や機械の提供など行政面からのバックアップも必要であると思われた。

今後の支援にむけた提案としては、以下のことが考えられた。

親の会などの支援については、加藤義男氏（岩手大学名誉教授・JDD ネットいわて）を軸にして各地の親の会へのサポートを行っていく。まずは少人数で親の会を作って、地域の支援者とのネットワークを作っていく、場所の設定だけ行政でやって保護者に主体的に使ってもらうなど。また、講演会などの開催による発達障がいへの理解や対応の仕方についての啓発も必要であろう。

余暇支援については、特別支援学校の活用や作業所、通所の福祉施設の活用により安定した習慣づくりの支援を行う。また、子どもを預けることにより疲弊した家族が一息つける時間を提供する。

今後の対策としては、発達障害のある子の避難場所として、各種施設など小さな場所をいくつか設定しておく。避難所でのパーソナルスペースはテントを用いてできるだけ安定した環境をつくる。

各地域における支援の方向性と連携については、宮古、釜石、大船渡、一関、平泉、盛岡の支援者から各地域における活動の方向性があげられた。また、情報交換により連携の仕方を取り入れたり、内陸部から沿岸部にペアレントメンターを派遣するなどの地域間の支援についても検討された。

第2回 活動

平成24年1月27日～30日

平成 24 年 1 月 27 日 (金)

久慈圏域 子ども発達支援ワークショップ

～震災から見えた子どもへの支援のありかた・ささえかた～

1. プログラム

久慈圏域における発達支援ワークショップは、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された。プログラムを以下に記す。

- | | |
|--|-------------|
| (1) 開会 | 13:00～13:10 |
| (2) 基調報告 | 13:10～14:00 |
| 「震災から見えた子どもたちの発達を支える地域ネットワークづくり」
講師:市川宏伸(東京都立小児総合医療センター顧問・JDD ネットワーク 理事長) | |
| (3) 子育て実践講座 | 14:00～14:50 |
| 「子どもの健やかな育ちを支える ー子育て支援から発達支援へー」
講師:岡村章司(兵庫教育大学 准教授・JDD ネットワーク) | |
| (4) ワークショップ | 15:10～16:30 |
| 「一緒に考えよう! こどもの成長を地域で支えるために大切なこと」
司会:安達 潤(北海道教育大学旭川校・JDD ネットワーク) | |

2. 企画・活動の概略

(1) 基調講演

基調講演は、発達障害概念がまだ一般的でない沿岸部における発達障害概念の普及と発達障害支援の現状、発達障害支援のあり方を、「震災」後に把握された子どもたちの変化と関連させて伝えるものであった。基調講演によって、被災地沿岸部のこれからの復興作業の中に発達障害支援施策を盛り込んでいくことの重要性が示されたと考えられる。講演の内容概要は、震災直後から現在までの経過の中で、支援内容が「震災によるストレス反応」から「元々あった問題の顕在化」に徐々に移行してきていること、その中で子どもたちが示している変化のベースに発達障害特性が存在する可能性、制度を含めた発達障害支援のこれまでの経過、発達障害の特性の理解、発達障害が連続体であること、家族支援が重要であること、などで構成されており、今後、被災地沿岸部での発達障害支援体制を構築していく上での重要な視点が盛り込まれているものであった。

(2) 子育て実践講座

本講座では、震災後の子どもたちの変化として把握されていることをテーマとしつつ、その変化が発達障害特性だけではなく、その特性に対する理解や支援が十分ではないことも背景に存在していること、そして、子育て支援と発達支援が連続性を持っていることを伝えるものであった。講座の具体的内容としては、環境調整の重要性、子どもの実態把握をするときに大切な視点、支援目標の立て方、指示の伝え方、評価の仕方、叱り方、学習

支援のあり方などの詳細を、実際例を交えて説明するものであった。また、講座の最後では、子どもの周囲にいる大人たちが連携体制を構築することが子どもの育ちを支える上で、そして支援者サイドが支援を提供し続ける上で有用であることが伝えられた。

以上の内容は、被災地沿岸部では「障害」がスティグマになりやすいということの考慮を背景としたものである。その意味で、今後の被災地沿岸部での復興の中に発達障害支援を盛り込んでいく際の基本的視点を示すものでもある。

(3) ワークショップ

ワークショップは、以上の基調講演と実践講座を受けて、地域の人たちが地域において、子どもたちの支援体制をどのように築いていきたいのか、そのためにどのような連携が可能なのか、ということ、小グループディスカッションの中で参加者自身が実感できることを意図して設定された。ワークショップの最初に、全体の方向性を提示する意味で、子育ての中で気がかりさを感じる場合もあること、でもそれが支援につながりづらいこと、ナチュラルサポートの重要性、「特別」と考えることのデメリット、親子へのニュートラルな関心の重要性や、親子の居場所が地域にあることの重要性などとともに「子どもの個性や特徴にそった子育て支援」が重要であることを伝えた。そして、ディスカッションの4つの観点として、①久慈地区をどんな地域に創っていきたいか、②「地域で子どもを育てること」をどんな考えでみんなで語り合っていきたいか、③親や支援者や行政・・・を超えて、人と人とがどんな風に繋がっていけるか、④そしていま、とりあえず、できそうなことは、を掲げて小グループディスカッションと、そのディスカッション内容の全体共有を行った。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

ワークショップの小グループディスカッションで提示された共通意見としては、「安心して暮らせる地域」、「人とのつながりを感じることでできる地域」、「子どもの良さを広げ伸ばすことでできる地域」といったものがあつた。また、そのような地域を実現するための具体的なニーズや工夫として、「子どもたちが安心して遊べる場所」、「高齢者の多い地域なりのよさの活用」、「誰でも集まれる場所、自然な出会いのある場所」、「子育て支援センターとの連携」、「茶話会などのグループワークの機会」、「子どもたちのことに関する理解啓発（より自然な場で）」、「親に対するフォローの必要性」、「ナチュラルサポートの充実」、「できないところとできるところの両方に着目してもらえる学びの場」、「様々な支援サービスに関する情報」といったことが挙げられていた。情報に関するニーズの具体例としては「広報誌の充実」、「インターネット情報の充実」、「地域における支援リソースの全体像を見渡すことができる『ネットワークマップ』の作成」といったアイデアや要望があつた。さらに、一関市の「ええまちづくり隊」などの優れた先行事例について地域で学べるようにした方がいいといったことや、理解啓発と関連して、障がいのある子どもたちの作品などを展示する機会を増やすことなどについても話し合わ

れていた。

全体ディスカッションでは、上記の意見が各グループから提示され、全体として、これからの発達障害特性を持った子どもも含む子育て支援体制の構築に期待する方向性が同じであり、大きく言えば「子育てに取り組むすべての親子が安心して暮らせる地域づくりが大切であること」を志向していると考えられる。最後に司会者から参加者に「今回の研修会の参加は70名であり、この人数は、久慈市の人口規模（約3万6千人）を考えると、例えば、旭川市（約36万人弱）なら800名規模の大研修会であり、ここが必ずスタートになり得ること」を伝えた。

4. 活動の考察と今後への提案

グループディスカッションにおいて各グループで共通して語られていたことは、「つながり」や「支え合い」の重要性とそれらを実現するための具体的なアイデアやニーズであった。茶話会などの「機会」を設定することと併せて、地域の人々の交流を促し子どもが安心して遊ぶことのできる「場所」に対しては特に緊急性の高いニーズがあることがうかがえた。親の会などの立ち上げの必要性についても語られていたグループもあり、地域における「ネットワーク作り」が長期的に取り組んでいくべき大きな目標になるのではないかと考えられた。また、「情報」に関するニーズも多く出されていた。

参加者アンケート（回収率50%）では、非常に満足・やや満足が94%を占めており、今回の企画が参加者のニーズに合致したものであったことが示された。また、ワークショップにおける自由記述においても、「地域のつながりの重要性が今後に必要な」、「当事者のみでなく、さまざまな職種の方と一緒にワークショップができてよかった。あと30分ほしかった」、「時間が短かった。もっと夢のお話、いまからできそうなことを話し合えればよかった」、「もう少し時間がほしかった。課題の共有が図られたことが一番の成果だった」、「今回のようなものを数多くやってほしい」といった意見が認められた。

以上に示された活動の結果は、地域で子育て支援や発達支援に携わる人たち、親御さんたちが立場を超えて集まって、地域をどのように創っていくかということをお話あう機会を積極的に準備していくことが必要であることを示している。今回、参加者から挙げられたアイデアや要望の大部分については、そのような機会を通じて、行政と地域（支援者や親御さん）との適切な協力関係、相互の連携体制を築いていく中で実現することが可能なのではないかと考えられた。

平成 24 年 1 月 28 日

宮古圏域 発達支援セミナー

未来に向かって顔張るために ～地震と津波と子どもたち、そして これから～

1. プログラム

宮古圏域における発達支援セミナーは、岩手県、岩手県教育委員会、久慈地域障害者自立支援協議会と日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された。プログラムを以下に記す。

- | | |
|--|-------------|
| (1) 開会 | 10:00～10:05 |
| (2) 報告 「JDD ネット岩手から アンケートの結果報告」 | 10:05～10:30 |
| 報告者：加藤義男 氏（岩手大学名誉教授） | |
| (3) 講演 「地域における一貫した支援体制について」 | 10:30～12:30 |
| 講師：安達潤（北海道教育大学 教授・JDD ネット） | |
| (4) 昼食・休憩 | 12:30～13:30 |
| (5) シンポジウム：震災を経験して～そのとき、そしてこれから～ | 13:30～16:20 |
| 司会：前川あさ美（東京女子大学・JDD ネット） | |
| 第 1 部：～これまで：シンポジストからの体験報告 | |
| ①宮古圏域の状況から、学校・避難所、相談支援を通して | |
| ：宮古圏域自立支援協議会「発達支援部会」部会員（岡崎薫 氏・高屋敷大介 氏） | |
| ②東日本大震災を経験した相談支援の立場から | |
| ：藤原伸哉 氏（相談支援事業所トーク 相談支援専門員） | |
| ③東日本大震災を経験して～保護者の立場から～ | |
| ：田澤幸子 氏（岩手県自閉症協会沿岸北 会員） | |
| ④子どもたちの笑顔を復興の力に～人との関わりを大切にしながら～ | |
| ：伊藤明美 氏（宮古市立赤前小学校 副校長） | |
| 第 2 部：これから～ | |
| 会場全体での意見交換 | |

2. 企画・活動の概略

(1) アンケート報告

JDD ネット岩手「震災後発達障害支援チーム」によって平成 23 年 11 月に実施された、「発達面・行動面で気になる子どもをお持ちの保護者の皆さんへのアンケート」および「震災における発達面・行動面で気になる方に関する調査（支援者アンケート）」の中間報告が行われた。結果の詳細は、JDD ネット岩手より提示される正式な報告書を待つことになるが、震災後の発達障害特性を持つ子どもたちや人たちの適応不全の現れを具体的に把握している点で、重要な報告であった。結果に基づいて、発達障害特性を持つ子どもたちの心理的

サポートの必要性、親へのサポートの必要性、特別な支援ニーズを持つ方々に特化した避難所の整備、平時からの地域での療育福祉体制、支援体制、支援ネットワークの必要性が強調された。

(2) 講演

講演内容は、発達障害特性を持つ児者に対する地域での一貫した支援体制を築いていくための課題がどこにあり、どのような視点を持って地域で取り組んでいくべきであるか、そしてそのような視点での取り組みの実際についてである。この内容は、アンケート結果が示した「平時からの地域での療育福祉体制、支援体制、支援ネットワークの必要性」および宮古市教育委員会が作成し活用されている PASS（子どもの就学に向けての支援シート）の考え方とも連続性を持つものであった。

(3) シンポジウムと意見交換

震災発生直後から現在までの、発達障がい児を主としたニーズのある方々の実態に関する、各立場からの報告を受け、今後必要なもの、サービスやシステム等を探っていくことを目的とした。相談支援員、保護者、小学校教員からこれまでの取り組みに対してご報告いただいた。

3. 午後の企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

相談支援員からは、具体的な事例を通して、津波の被害により、近所がなくなることで要支援者として浮かび上がるケースがあったり、避難所生活開始から2～3週間後には暇を持って余す子どもたちが多かったりなど、様々な実態が報告された。保護者からは、震災直後から現在までの子どもの変化が丁寧に報告された。小学校教員からは、子どもたちの様子とともに、具体的な配慮や支援について説明がなされた。避難所訪問や各種相談、教員による定期的な全児童面談など、支援者が非常に丁寧な支援を行ってきたことが確認された。また、自閉症協会の会員からの積極的な援助、震災前より地域とのつながりができ始めていることや時間の経過に伴い、子どもたちが表現できるようになってきたといった望ましい変化も明らかになった。

これらの報告を受け、フロアーからも様々な意見が出された。以下に、参加者から出された意見を挙げる。

- ・震災直後は生活物資だけでなく、子どもたちが生活するために必要なアイテム（DS など）の配給が望まれる。
- ・これまで地域に貢献してきた人たちを、表彰するなど、きちんと評価するべきである。
- ・仮設住宅に全ての人が入って生活がある程度落ち着いた現状だからこそ、今後の支援のあり方が問われてくる。
- ・日常生活における普段からの支援が災害時に大きな支援につながることから、支援ネットワークづくりのための具体的な取り組みを行っていく必要がある。
- ・被災によるものではなく、本来必要であった支援ができる地域づくりが望まれている。

- ・若い力が少なくなっていることを考慮しながら仕組づくりを行う必要がある。

4. 活動の考察と今後への提案

宮古圏域の発達支援セミナーは震災を契機に震災以前から存在していた地域における支援体制の脆弱さを再認識し、これからの復興の経過の中で、しっかりした支援体制を地域で築いていく方向性を参加者が共有する目的で実施された。その目的に照らすと、今回の発達支援セミナーはよい形で成果を残すことができたと考えられる。そのことは当日のアンケートにも現れており、「今回のセミナーは参考になった」との評価が回答者全員から得られた。宮古圏域の自立支援協議会は、福祉サイドと教育サイドのメンバーで構成されており、そこから広がった参加者に加えて、保護者の方々も会に参加し、またシンポジウムで報告をされたことは、この地域の今後のネットワークが築かれていくための一つのスタートポイントとなると期待される。アンケートの自由回答の中で、「定期的このような会があると気持ちも引き締まる」、「(講演で提示された地域実践は) あったらいいなと思っていたことであり、新しい情報で参考になった」といった内容があったことから、今後の地域支援ネットワークの形成をいかに支えていくかが大きな課題であり、今後を左右するポイントとも思われる。今後の行政提案としては、沿岸部地域単独での開催だけでは支えが弱い部分もあることから、今回のような県行政のバックアップがある形でありつつ、地域主体の企画を立てて、その中で、地域の方々が自由に意見を交換出来る機会を保障していくことが必要であろう。

平成 24 年 1 月 29 日 (日)

釜石・大槌圏域

午前企画：みんなの子育て茶話会

～地域でそしてみんなで子どもの育ちを支えていくために～

午後企画：子ども発達支援ワークショップ

～震災から見えた子どもへの支援のあり方・支えかた～

1. プログラム

釜石・大槌圏域における活動は、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された。プログラムを以下に記す。

<午前> 「みんなの子育て茶話会

～地域でそしてみんなでこどもの育ちを支えていくために～

ファシリテーター：前川あさ美 (司会)・安達潤・岡村章司・大久保賢一

(釜石市市民交流センター文化施設 集会室) 10:00～12:00

<午後> 「こども発達支援ワークショップ

～震災から見えたこどもへの支援のありかた・ささえかた～

(釜石市市民交流センター文化施設 大会議室) 13:30～17:00

(1) 開会 13:30～13:40

(2) 実践講座 1 13:40～14:30

「こどもたちの心の理解とケアの基本的視点」

講師：前川あさ美 (東京女子大学・JDD ネット)

(3) 実践講座 2 14:30～15:30

「子どもたちの発達を支えるための具体的なポイント」

講師：大久保賢一 (北海道教育大学・JDD ネット)

(4) ワークショップ 15:50～17:00

「いっしょに考えよう！こどもの成長を地域で支えるために大切なこと」

ファシリテーター：安達潤 (司会)・前川あさ美・岡村章司・大久保賢一

2. 企画・活動の概略

<午前> 「みんなの子育て茶話会」

みんなの子育て茶話会の対象は、「育ちの気になるお子さんを育てているご家族、障害のあるお子さんを育てているご家族、教育関係者、福祉関係者」であり、子育ての視点を中軸に、さまざまな子どもの育ちをサポートしていく上でこれからの地域に必要なことを語り合う場として設定された。茶話会の流れとしては、最初に小グループ内の自己紹介を行い、同じものでも人によって見方が異なることを実感するアイス・ブレイキングを通じて「互いの見方が異なっても両方とも正解だと言うことがあること」を実感してもらい、簡

単な課題を小グループで解決していくアイス・ブレイキングを通じて「みんなが協働・連携することの有用性」を実感してもらった。次に、小グループでのディスカッションとして、「子育てや子どもと関わる中で・・・最近驚いたこと、最近感動したこと、最近困ってしまったこと、最近大笑いしたこと」のいずれでもよいので話題提供をして交流をするという内容を行った。

<午後>

午後の発達支援ワークショップの対象は、「教育関係者、福祉関係者、関心のある住民のみなさん」であり、支援者の人たちに対して、発達障害概念を「子育て」という視点から捉え返してもらうことを意図して設定された。プログラムを以下に記す。

(1) 実践講座1

実践講座1では、発達が気になる子どもの理解とケアに焦点を当て、「発達」という視点、「困っている」に寄り添う視点、「障害」のDより「違い」のDを見る視点、「治す」ではなく「コントロールする」「生かす」視点、変化は個人を超えて生じるという視点、「受容」をゴールにしない視点、「彼らを合わせる」から「彼らに合わせる」視点、「わたしたち」で生きていくという視点、という8つの視点の提示に沿って、すべての子どもたちを、その子どもたちのありのままの姿で受けとめ、その育ちを支えていくことの大切さを伝えた。その意味で本講座はや「障害の有無に焦点を当てる考え方」を相対化する内容であった。このことは「障害」がスティグマになりやすい被災地沿岸部において、これから地域に必要とされる視点であり、地域の支援者にこの内容を伝えられたことの意義は大きい。

(2) 実践講座2

実践講座2では実践講座1を受けて、子育て一般に活用できる行動マネジメントの原理をわかりやすく解説し、発達の気になる子どもとの関わり方を実践的に伝えた。講座内容の大きな3つのポイントの第1ポイントは『子どもを「ほめること」の重要性』であったが、ここでは「子どもがやる気になるときとならないとき」を対比させつつ、子どもが行動をした後にどのように対応するかの重要性が伝えられた。第2ポイントの『「スモールステップ」の大切さ』では、子どもが自ら成功しやすくなる状況設定を通じて、子どもの自主性を育てていくことの大切さが、第3ポイントの『「自立を促す援助」の考え方』では他者の援助から本人のコントロールに移行していくことの大切さが伝えられた。以上の内容を通じて、子どもが主体的に自らの行動をコントロールして、自分らしく育っていくことができるための支援のあり方を示した。

(3) ワークショップ

ワークショップでは、支援者の側として、当該地域の課題と考えること、支援活動の中でいま困っていること、当該地域での支援をこれからどのように創っていきたいか、等について自由に意見交換をしてもらい、全体共有を行った。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

<午前：みんなの子育て茶話会>

困ったことだけでなく、笑ったことなどほほえましいエピソードが多数報告された。最後に、参加者からの「病院などの専門機関にどのようにつながっていけば良いかが分からない」という訴えをもとに、全員でその課題に対して意見交換を行った。参加者から挙げられた子どもの支援に関する質問に対しては、JDD メンバーから、具体的な支援アイデアが提供された。さらに、困ったことを他者と共有することで安心したなど、困っていることを伝え合うことも有意義であることが確認された。保護者や支援関係者が一堂に集まって意見交換ができたことは有意義であったという感想が多く、「身近にある支援を充実してほしい」「お互いに何でも話し合える場を作るのがよい」など、ネットワーク作りに関する要望が挙げられていた。

<午後：ワークショップで挙げられた参加者の意見>

ワークショップでは、多職種の支援者が参加していたこともあって、さまざまな立場からの意見交換が行われた。提示された意見には、地域の課題と考えられるものと同時に、地域の今後の支援体制整備につながる内容のものがあった。以下、主な意見を列挙する。

- ・知的に遅れがない発達障害児を支援する場がない。
- ・診断されていない、気になる子どもを持つ保護者に対する対応を工夫する必要がある。
- ・保護者が困ったときに市役所のどこに相談して良いかが分からない。
- ・保護者のつながりがない。親の会同士が集まる機会があってもよい。
- ・コミュニティーが壊れてしまって、ナチュラルサポートがなくなった。
- ・お母さんたちのつながりがない。子育ての相談をする場が少ない。
- ・不安を話し合える場所がない。サポートセンターなど、新しく利用できる場が震災後にできてきたが、その情報の広報をしてもらいたい。
- ・震災前にやっていた月一回の子育て相談会のこれからの動きとして、母子保健と子ども課と障がい福祉課の3つで合同開催できればよいね・・・という考えもある。
- ・障害の有無に関係なく、子育て茶話会のような会を子育てお悩みランキングというタイトルでやった園がある。その場には、障害のある子どもをもっている母親もいたが、自然と話ができていた。
- ・子どもが集える場がない。子どもが遊べる、暴れられる場所がなくなってしまった。
- ・支援学校と福祉関係の交流はあるが、市立の小中学校の先生との交流がない。

4. 活動の考察と今後への提案

午前中の茶話会を実施した際に、参加者の方々から「茶話会って、どんなことをするのか？ 初めてだ・・・」という声が聞こえてきたことが、企画担当者としては、少なからず驚きであった。初めての体験だということもあり、最初は、緊張した雰囲気が始まったが、アイス・ブレイキングを進める中で和やかな雰囲気が現れ、小グループでのディスカッションでは、さまざまな思いが提示されていた。茶話会のアンケートでは、非常に満足・や

や満足を合わせた評価が、得られた回答（回収率 89.4%）の約 94%を占めており、参加者のニーズに合致していたことが示された。自由記述では「このような会は必要だし、またやってほしい」、「親どうしのつながりはたくさんあった方がよいし、お互いに何でも話し合える場を作るのがよい」、「ネットワークづくりが大切」、「専門家によるコーディネートがほしい」、「中央に行かなくても、身近にある支援を充実してほしい」といった意見が示されていた。

午後の発達支援ワークショップでは、当該地域の課題とともにこれからの支援体制整備の芽生えもあることが示され、支援者が地域の現在を相互に共有し合うことの重要性が確認された。ワークショップのアンケートでは、非常に満足・やや満足を合わせた評価が、得られたアンケート回答（回収率 70.4%）の 100%であり、参加者のニーズに合致していたことが示された。自由記述では「子どもが元気良く外で遊べる場所が少ないということが分かったし、障がい児を持つ親が少しでも不安なことや思っていることを話せる機会をもっと増やしてほしいと思った」、「異なる業種の方々のそれぞれの視点で釜石の将来について話し合えたことは有意義だった」、「発達障がいの保護者はつながるまで時間がかかること、その間孤立してしまわない仕組みが必要だ」、「保護者、当事者が孤立しないような支援、ネットワークを地域で作っていききたい」、「今できることは茶話会の呼びかけ、他の機関との連携等である」、「親どうしの話の場づくり、家族への支援をこれからしていきたい」等の回答があった。また、実践講座についても、「大変分かりやすく、役に立った」、「今日学んだことを実践するので、次の機会に振り返りたい」といった回答があり、実践的な学びについてのニーズも高いことが示された。

以上、午前企画と午後の企画を通じて、把握されたことは、地域ネットワークの構築がこれからの地域課題として求められており、そのことが茶話会やワークショップを通じて参加者の中で意識化されたことである。当該地域には行政ベースの子育て相談会や民間幼稚園ベースの子育て茶話会の動きがあり、子育てに視点を置いた発達支援のネットワーク形成の潜在力がある。しかし全体として眺めると、子どもや保護者が集う場がほとんどない現状の中、支援の仕組がまだ整っていない状況もある。地域の潜在力をエンパワメントする方向で、誰でも参加できる子育て相談会を企画するなど、これから支援の仕組づくりを行っていく必要がある。

平成 24 年 1 月 30 日（月）

大船渡（気仙）地域

みんなの子育て茶話会

～地域でそしてみんなで子どもの育ちを支えていくために～

1. プログラム

大船渡（気仙）地域における活動は、岩手県、岩手県教育委員会、日本発達障害ネットワークの企画・主催で実施された。プログラムを以下に記す。

「みんなの子育て茶話会 ～地域でそしてみんなでこどもの育ちを支えていくために～」

ファシリテーター：前川あさ美（司会）・安達潤・大久保賢一

（大船渡市市民会館（カメラアホール） 研修室）

10:00～12:00

2. 企画・活動の概略

みんなの子育て茶話会の対象は、「育ちの気になるお子さんを育てているご家族、障害のあるお子さんを育てているご家族、教育関係者、福祉関係者」であり、子育ての視点を中軸に、さまざまな子どもの育ちをサポートしていく上でこれからの地域に必要なことを語り合う場として設定された。茶話会の流れとしては、最初に小グループ内の自己紹介を行い、同じものでも人によって見方が異なることを実感するアイス・ブレイキングを通じて「互いの見方が異なっても両方とも正解だと言うことがあること」を実感してもらい、簡単な課題を小グループで解決していくアイス・ブレイキングを通じて「みんなが協働・連携することの有用性」を実感してもらった。次に、小グループでのディスカッションとして、「子育てや子どもと関わる中で・・・最近驚いたこと、最近感動したこと、最近困ってしまったこと、最近大笑いしたこと」のいずれでもよいので話題提供をして交流をするという内容を行った。午後は、同室において JDD のメンバー、岩手県しょうがい保健福祉課の小澤氏、地域の支援者がミーティングを行い 1 月の訪問全体を総括し、それ以降の計画について検討を行った。

3. 企画・活動の中で収集された情報（参加者の意見交換の内容等）

「子育てをされていて感動した話」として、「子どもが物語を読んで、それに感動して涙するということがあり驚いた」といった意見や、「障がいのある子どもとそのきょうだいの両方を育ててみて、当然のことであるが一人一人違って、それぞれの子育てに面白さがあることに気づけた」といったことが話されていた。一方で「最近困っていること」として、「思春期の子どもへの対応」、「祖父母の過干渉（元気なお年寄りが多く、力強く子育てに参加してきて、手取り足取り子どもを手伝ってしまう）」、「通常学級在籍児に対する支援に関すること（介助員の配置や教師の対応）」、「通っていた保育所が被災して、障がいのある子どもを受け入れてくれる次の行き先をなかなか見つけることができ

なかった」という意見が出されていた。さらに地域の実情について、「特別支援学校や特別支援学級に在籍していない場合、保護者同士の繋がりがほとんどない」といった意見や「震災後、不登校の生徒の数が増加しているようなので（話されていたのは中学校について）、家族支援も含めた対応が必要だと思う」といった意見が出されていた。成人の就労支援を担当されている支援者の方からは、「子どもの将来が心配な親御さんは、色々な人が働いているところを見ればいいと思う」という意見が出されていた。また茶話会での意見交換を受けて「実は、こうした悩みや要望は今まで自分個人のことだと思っていた。震災後、そういう考え方が変わった。自分が今必要としていることは、他の親子にとっても必要になるかもしれない。そうした人たちのためにもあきらめないで行政と話をしていかなければならないと思っている。」といった意見も提示された。

4. 活動の考察と今後への提案

久慈地区同様、大船渡地区においても共通して挙げられていたニーズは、「子どもと家族の居場所づくり」、「地域における連携（家族同士のつながり、家族と専門機関とのつながり）の強化」、「効果的な情報アクセス」に関することであった。居場所に関しては、具体的には学童保育の充実を望む声があった。また、家族同士のつながりを築く手段としては今回のような茶話会を定期的に行うことの有効性を指摘する意見もあり、ネットワーク作りに関する具体的なプランを立案し、長期的な展望に基づき地域のキーパーソンを巻き込みながら充実させていくことが重要であると考えられた。情報アクセスについては、「困ったときにどこの誰に相談していいのかわからない」という意見があり、効果的な情報提供と広報についてさらなる検討が必要であることがうかがえた。

茶話会のアンケートでは、非常に満足・やや満足を合わせた評価が、得られた回答（回収率 79.2%）の約 74%を占めており、参加者のニーズにある程度合致していたことが示された。自由記述では「親の立場、支援者の立場からの話題が上がりやすく、コーディネーターしてもらえて良かった」、「2ヶ月に1回でもいいので、このような茶話会を定期的に行うのはどうか」などの回答があり、上記の地域ネットワークづくりへの期待が認められた。

一方、「このような会を進めていく上で、誰が企画し、どう運営するのが課題である」旨の意見もあり、地域で中心的に進めていくキーパーソンを立てていく必要性も示されていた。また、また茶話会の持ち方についてであるが「講師の話は見方を広げる視点が示されてよかったが、行政等がたくさんグループに入っている。親を中心に1人コーディネーターが入るような形で話をするのがよい」、「同じ立場の親同士の交流の機会がもっとほしい」、「できれば、関係者の方メインではなく、軽度・重度発達障がいとの関係なく、家族の人が多く集まって話を聞ける場が欲しい」といった意見もあった。これらは当該地域では、まず親どうしの話し合いの場を十分に醸成していくことの必要性を示唆するものとも考えられる。当該地域の体制整備については、地域のニーズを十分に踏まえて進めていく必要もあろう。

おわりに

本事業の 2 回の活動を通して、私たちが得たことは、被災地沿岸部の地域の人たち自身が、地域ネットワークを構築していくことを希求しているという事実であった。被災地沿岸部は岩手県の内陸部からの距離が遠く、発達障害支援の専門的資源も十分ではない。さらに、「障害」が社会的スティグマとなりやすい地域特性もある。

しかしそうであるからこそ、発達障害が「障害の連続体」という概念をもたらし、「障害の有無ではなく、支援ニーズの濃淡がそこにあるだけだ」という視点が岩手県沿岸部に根づいていくことを、これからの展望としていく必要があるように思われる。

今回の活動の中で、発達障害に関係する沿岸部の人たちは、私たちが展開したような「茶話会」のような機会がこれからも継続されることを強く望んでいた。人と人とが会う場所と機会を提供し、人と人とが膝をつき合わせてかかわり合う中で生まれてくるパワーをエンパワメントしていくことが、被災地沿岸部でのこれからの復興作業の中で、まずは必要なことであると思われる。そして、そのエンパワメントのあり方は「被災地沿岸部」と一括りにできるものではなく、北から南にかけて、やはり微細な地域性の異なりがあり、そのことに配慮していく必要があると思われた。

私たちは、今回の私たちの活動を通じて、沿岸部に、(発達)障害児者支援にかかわる地域ネットワーク構築の小さな種を蒔くことができた信じたい。この種が小さな芽を出して、その芽が育っていくことを願うばかりである。そして、その芽のこれからの育ちにかかわって私たちにできることがあれば、再び、力を尽くしたいと思う。

岩手県 被災地発達障がい児支援事業
実施担当 JDD ネットワーク専門家チーム
(文責：安達 潤)